

柳宗悦と民藝運動における美と倫理

越智秀一（思想史研究者）

はじめに

柳宗悦（1889～1961）は、浄土教を中心とした思索を遺したことから、宗教哲学者と位置づけられているが、学習院で同窓であった白樺派の文人たちと、若年のころから欧米の文学や美術の摂取に励み、転じて工芸の道に足を踏み入れ、芸術ではなく日常生活で用い、「用の目的に忠実である」工芸品を「民藝」と呼んで新たな価値を見出し、富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司ら同志たちと「民藝運動」を展開し、その指導者として日本近代工芸史にその名を刻んだ。柳の思想の展開は単に「美」の世界にとどまるものではなかったため、その思想の持つ意味を本格的に明らかにしようとする研究はまだ少ない。本稿では美術史や工芸史としてではなく、柳と民藝運動を彼の思想の母胎となった白樺派との関連をふくめて論及している鶴見俊輔、松井健らの研究を批判的に参照しつつ、柳と民藝運動が持つ現代的意義について考察を試みることにする。